

詠む広場

毎日俳壇

片山由美子選

ボート漕ぎ終へたる腕を水に浸け

和歌山 手押 鷹翔

△評▽ほてった腕を冷まそうと、船端から横に伸ばして水に浸しているのである。どれだけ力いっぱい漕いだかが分かるだろう。

遠くまで跳んで見せたるげつたかな

川口市 高橋さだ子

△評▽こんなに跳べるとは、という驚きがある。「跳んで見せたる」がちょっと得意そうだ。

年ごとに小さくなりゆく踊の輪

加古川市 伏見 昌子

客船の灯の消えてより揚花火

白桦市 村上 玲子

仏壇に銀座の最中秋彼岸

武蔵野市 相坂 康

お隣もそのお隣も門涼み

筑西市 大久保朝一

梅干せばたちまち雲の出でにけり

土浦市 今泉 準一

助走して躑躅が立つ炎天下

安中市 大澤信太郎

校庭に村ちゆうの人盆踊

奈良市 上田 秋霜

振り向きもせぬ子見送る炎天下

鯖江市 木津 和典

小川 軽舟選

独り身の鍵の軽さや夏の月

市川市 高野 厚夫

△評▽鍵の軽さはこの家で守らなければならぬものがない身の軽さでもある。その境遇を受けいれて涼しげな月を仰ぐ。

遠雷や夕平均の乱高下

加古川市 伏見 昌子

△評▽政府はNISAで投資を勧めるが、本当に大丈夫なのだろうか。遠雷が不安を表わす。

新涼やサイン貰ひし新刊書

東京 関口 昭男

緑陰の移動図書館椅子ふたつ

我孫子市 新井美枝子

眠られず袋菓子食ふ熱帯夜

吉野川市 喜島 成幸

糸を引くやうな秋雨降り止まず

宋栗市 宗平 圭司

参道の片陰に寄りの杖をつへ

厚木市 奈良 握

扇風機をよ風にして夜もすがら

越谷市 塚田 順次

秋夕焼母を残して鳥を去り

東京 横尾 恵子

泡たたぬ瘦せた石鹼果つる

ドイツ 広谷 朝子

西村 和子選

新盆やなほ時きさむ腕時計

加古川市 伏見 昌子

△評▽故人がいつも身につけていたものだけに、命の名残を感じる。初めてのお盆を迎える遺族の情が物に託されている。

まだ何か顔出しさうな蟬の穴

茅ヶ崎市 古田 哲弥

△評▽すでにセミが出て行った後とは知りながら、黒々と目立つ穴は何か落ちていたようだ。

湖に静けさ戻る白雲かな

枚方市 門川 清秀

薪風呂の肌にあさき避暑の宿

武蔵野市 相坂 康

夜の秋の耳に哀しき琉歌かな

志木市 谷村 康志

川岸に四駆の並ぶ鮎解禁

真岡市 小川 充

落日の海や高鳴る祭笛

富士宮市 渡邊 春生

故郷の話聞きたし草草

河内長野市 守口 幸子

とうしみの緋の葉先の水漬きけり

東京 山口 照男

指をもて弾く網戸の黄金虫

鹿嶋市 津田 正義

井上 康明選

坂東太郎とて銀漢の支流なり

武蔵野市 相坂 康

△評▽坂東太郎は利根川の意。とうとうと流れる坂東太郎も、銀河の支流だと夜空の銀河と地上の利根川をつなぐ壮大な把握である。

生身魂月下の花を摘みぬたり

甲府市 清水 輝子

△評▽生身魂は盆の集まりの敬うべき老人。その人が先祖供養のため月下の花摘みをしている。

人混みの街くろくろくと残暑かな

宗像市 水 芭蕉

イルカ展見に父母と夏休み

唐津市 梶山 守

さちさちや父の形見の腕時計

松原市 たりつむ

顔見せに来て帰る子に今年米

八街市 山本 淑夫

爪の土落とし終るや草筆り

横浜市 斎藤 山葉

流星やサハラ空を見あげる夜

明石市 吉室 奨

自販機の品切れランプ秋暑し

野田市 塩野合慎吾

遠雷は空音なりや健次の忌

東京 石川 黎

若さの熱量

高田正子



出会いの季節

8月の終わり、暑い暑い松山で、俳句甲子園の熱い戦いに審査員として参加した。昨年に続き2度目であったが、私の中では既に、これが済まないと秋が来ないくらい位置づけてしまっている。
熱戦の2日間あとは瀬戸内の島へ。
昨年はいくつかの島を友人と2人で巡ったのだが、それがあまりに楽しくて、今年も現地で句会をしよと身近な方々に声をかけてみた。すると膝を突き合わせて句会ができる人数となったのだ。
・秋の航一大船円盤の中
中村草田男
視野のどこかに陸地が入っている瀬戸内の航路であるが、気分はいつも船円盤の中。今年も豊島に泊まり、直島へも向かう計画。望みだった現地の句会はず、1回目は直島の海岸近くの施設にて。大きな空調が頼もしい音を立てていた。2回目は豊島美術館で過ごしたあと、帰りの船の時刻までを宿泊施設にて。ここでうれしい出会いがあった。島の若い住人が2人見学にいらしたのである。どちらも作句は小学生以来、句会へは初参加とのことであったが、投句してみませんか」と誘つと、さっと短冊を取りあげた。
・天の川これが愛よと走りだす
深山わこ

そのお一人の句。天の川があまりにきれいで、何か叫びながら走ってみたい。なる感覚は年齢を問わないが、実は彼女は仕事で島を訪れ、結婚に至ったお方。作者が判明した瞬間、句座は喜びの歓声と拍手に沸いた。甲子園に続き、若いエネルギーに触れた旅であった。
(たかだ・まさこ「俳人」)